

NEWSLETTER

2024 年度研究関連活動報告

◆ 研究会 2024

- ・ 日時：2024 年 7 月 21 日（日）13:00～15:00
- ・ 会場：関西大学千里山キャンパス岩崎記念館／Zoom Meetings（ハイフレックス）
- ・ 参加費：無料（会員）、500 円（非会員）
- ・ プログラム

講演「国際協力とグローバルスキル～日本の教育現場と国連の現場から～」
宮口 貴彰 先生（関西大学外国語学部 教授）

◆ 院生主催による第 5 回秋季研究会

- ・ 日時：2024 年 12 月 15 日（日）14:00～16:00
- ・ 会場：Zoom Meetings（オンライン）
- ・ 参加費：無料（会員）、500 円（非会員）
- ・ プログラム

講演「Willingness to Communicate: 第 2 言語学習者の理解を目指して」
八島 智子 先生（関西大学名誉教授）

◆ 関西大学外国語教育学会第 19 回研究大会

- ・ 日時：2025 年 3 月 16 日（日）13:30～16:35
- ・ 会場：関西大学千里山キャンパス岩崎記念館／Zoom Meetings（ハイフレックス）
- ・ 参加費：無料（会員）、1,000 円（非会員）
- ・ プログラム

- ・ 基調講演「言語教育におけるインクルージョンを考える」

山崎 直樹 先生（関西大学大学院外国語学部・外国語教育学研究科教授）

- ・ 研究発表 “Changes in L2 and L3 Learning Motivation among Adults in the Multilingual Workplace”

持留 沙智子 氏（京都ノートルダム女子大学非常勤講師）

- ・ 外教学会 研究部会による活動報告

1. 外国語学習における暗示的指導 グループ
2. 異文化理解 グループ
3. 発音研究部会
4. 基礎研究マスター 研究グループ
5. AI と外国語教育 研究グループ

<報告 I >

◆ 研究会 2024

- ・ 日時：2024年7月21日（日）13:00～15:00
- ・ 会場：関西大学千里山キャンパス岩崎記念館／Zoom Meetings（ハイフレックス）
- ・ 参加費：無料（会員）、500円（非会員）
- ・ プログラム

講演「国際協力とグローバルスキル～日本の教育現場と国連の現場から～」

宮口 貴彰 先生（関西大学外国語学部 教授）

.....

...

今回の研究会は、この4月に本学に着任された宮口貴彰先生による御講演で、対面・遠隔合わせて37名の御参加がありました。

主要テーマとしては、①「『グローバル人材』の定義」②「グローバルスキルの実態」③「国際協力の仕組みと実態」④「国際機関の実像」が挙げられており、いずれも大変興味深い内容でした。①②では、文部科学省による「グローバル人材」の定義と、トニー・ワグナー元ハーバード大学教授による「21世紀のサバイバルスキル」を比較し、このうち後者のみにある「好奇心・想像力」について「自分で自分のリミットを作るのではない。ボーダーをなくして広げていくこと」とおっしゃっていたのが印象的でした。③については、そもそも「国際協力」とは何かということから、さまざまな行為主体（アクター）がそれぞれの影響力を有していること、2000年以降の援助の流れの変化などに関する説明がありました。そして、④については、国連とは「クラスルーム」（生徒会）のようなものであることや、模擬国連などの活動の紹介、意思決定のあり方の違いの説明がありました。

今回の御講演は、知っているようで実はよく知らない「国際協力」について、宮口先生御自身の経験を元にわかりやすく教えていただく大変有意義な機会となりました。個人的には、宮口先生によるグローバル人材の定義である「自分に根差して、自分で考え、試行錯誤し、その時々理想に向かって一歩ずつ進める人材」がとても印象に残りました。そして、外国語教育は、どんな人材を育てたいかという教育方針とのかかわりが、他の教育分野に比べて強いのではないかとことを



<報告 2>

◆ 院生主催による第 5 回秋季研究会

- ・ 日時：2024 年 12 月 15 日（日）14:00～16:00
- ・ 会場：Zoom Meetings（オンライン）
- ・ 参加費：無料（会員）、500 円（非会員）
- ・ プログラム

講演「Willingness to Communicate: 第 2 言語学習者の理解を目指して」
八島 智子 先生（関西大学名誉教授）

院生の皆さんからの強い要望があり、八島先生をお招きして長年取り組まれている Willingness to Communicate (WTC) について 90 分たっぷりお話いただきました。研究者の卵である院生に加えて現役?の研究者が数多く参加し、総勢 100 名を超える盛大な会となりました。まず、冒頭で八島先生の研究という行為そのものに対する考えをお話くださいました。それは、上野千鶴子氏の「学問は伝達可能な共有の知」という言を引き合いに、「研究は知を創造するだけでなく、コミュニティに参加し、コミュニケーションを磨くことをしなければいけない」というお話でした。本学会には現在自発的に生まれた 5 つの研究部会が存在し、忙しい仕事の合間をぬって活動を続けている学会員にとっては励みになる言葉だったのではないのでしょうか。その後、WTC の定義、研究が盛んな背景と変遷をお話いただきました。八島先生は異文化接触研究、異文化適応研究から研究者生活をスタートされたそうです。当時、異文化適応研究は心理学者が中心で滞在地の言語能力が重要な要因として扱われていなかったことに疑問を抱いたことが博士論文につながったというお話を伺って、日々の実践のなかで生まれた問いが知の創造につながるのだと感じました。

先生はこれまでに量的・質的アプローチから混合研究法に至る多様な研究手法を用いて、学習者の心理を解き明かし、理解を深めることに挑戦されてこられました。先生が今回のご講演を通して外国語教育に携わる我々会員に伝達・共有して下さった知は、「教室というコミュニティは、様々な要素で構成された一つのダイナミック・システムであり、参加メンバー一人ひとりもダイナミック・システムである。ゆえに、一人が変われば他の人も、コミュニティも変わる。コミュニティが変われば一人一人に影響する。一人一人の変化はまた全体を変える…。常に相互作用し、システムは常に変化する。WTC は変化を続ける教室の中で起こっていることや学習者の心理を見るためのレンズであり、うまく活用すれば学習者理解につながる」ということなのだと感じました。

学習者が授業中沈黙する背景には何があるのか、WTC のレンズを通して見れば、それまでとは違った景色が見えてくるのではないのでしょうか。

（文責：戎 妙子）

＜参加者の感想＞

Willing to Communicate に色々な要因が絡み合っていることは、実感を持ちながら、きちんと証明されたものを見聞きする機会がなかったため、大きな学びを得ました。また量から質へ、混合研究への流れ、GTA の具体例を見ることができたのも言語研究を俯瞰的にみる良い機会となりました。昨今、スマホ翻訳の精度があがり、必要なことは、スマホ画面を見ればこなせますが、それでは付随する出来事、エピソードで談笑する余裕は生まれません。そして経験不足から自信欠如、さらなる乏しい交流という悪循環につながりかねません。八島先生が学生との面談によって得られた知見である WTC の要素は、今後の教室活動を考える際大いに参考にしたいと思いました。

(文責：岡上 路子)

Willingness to Communicate (WTC) は、異文化対応力や国際的志向性とも深く関わっていることを、今回のご講義を通じて改めて認識しました。WTC を高めるには、学習者が自分と世界のつながりを実感できる機会を増やすことが重要です。しかし、第二言語を使用する際には、第一言語では感じない不安を覚えることがあります。語彙や文法の理解が不十分だと、発話時の不安が高まり、内容の把握に時間がかかることでさらに緊張が増します。また、第一言語では問題なく行える情報の入力・処理・出力が、第二言語では思うようにできないことが、さらなる不安を引き起こします。こうした不安を軽減するためには、教師が一方向的に指導するのではなく、学習者と相互に関わりながら学びを築いていく環境を整えることが求められます。学習者が安心して発話できる環境が整えば、WTC の向上につながり、自発的にコミュニケーションを開始する意欲も高まるでしょう。そのためにも、教師が学習者の不安や第二言語への挑戦に寄り添い、共に学びを創り上げる姿勢が不可欠なのだと感じました。

(文責：渡辺 怜)

八島先生のお話をうかがって、あらためて「教室」について考えさせられました。特に「ダイナミック・システムとしての教室のコミュニティ」について「一人が変われば他の人も、コミュニティも変わる、コミュニティが変われば一人一人に影響する、一人一人の変化はまた全体を変える…常に相互作用し、常に変化するシステム」と説明されていっしょにいましたが、はたして私は、普段から教室内での学生の変化をきちんと観察できているだろうかと思いました。また、もし学生に変化が生じていないのであれば、それはカリキュラムや授業の進め方に問題があると言えるのだろうか。昨今、日本語教育においても「行動中心アプローチ」の考え方に基づいた授業実践が求められるようになってきているのですが、タスクベースの授業実践によって、学生ができるようになったことが Can-do によって可視化されれば、学生の変化を学生自身も教員も実感できるようになり、教室がよりダイナミックな空間になるのではないかと考えます。そうすることで、最後に八島先生が示された「様々な背景を持った人とのコミュニケーションを心から楽しむ、そしてコミュニケーションで違いを埋めようとする対話のスペース」が実現するのではないかと感じました。

(文責：惟任 将彦)

<報告 3>

◆ 関西大学外国語教育学会第 19 回研究大会

- ・ 日時：2025 年 3 月 16 日（日）13:30～16:35
- ・ 会場：関西大学千里山キャンパス岩崎記念館／Zoom Meetings（ハイフレックス）
- ・ 参加費：無料（会員）、1,000 円（非会員）
- ・ プログラム

- ・ 基調講演「言語教育におけるインクルージョンを考える」

山崎 直樹 先生（関西大学大学院外国語学部・外国語教育学研究科教授）

- ・ 研究発表 “Changes in L2 and L3 Learning Motivation among Adults in the Multilingual Workplace”

持留 沙智子 氏（京都ノートルダム女子大学非常勤講師）

- ・ <外教学会 研究部会による活動報告>

1. 外国語学習における暗示的指導 グループ
2. 異文化理解 グループ
3. 発音研究部会
4. 基礎研究マスター 研究グループ
5. AI と外国語教育 研究グループ

.....
<研究発表>

近年のアジア圏からの訪日外国人客が著しく増加しています。その影響で英語以外の言語を話すことが求められる企業も増えています。今回のご発表では、そのような昨今の社会情勢を背景に、L2 動機づけ自己システム論を理論的枠組みとして、複数の言語を使用する職場で働く社会人の L2, L3 学習動機づけはどのように変化していくのかを、質的に分析研究された成果を共有していただきました。研究対象は、韓国語（L2）と英語（L3）を使う環境にある方 3 名で、うち 2 名は航空会社や空港、1 名は一般企業に勤務している方々。分析からわかったことは非常に興味深いものでした。まず、3 名に共通していることは、1) 韓国語に対する明確な理想自己を持っていた、 2) 英語より韓国語に価値を見いだした、3) 働き始めてからは韓国語に対する学習動機づけの高まりは見られなかった点があるとのことでした。そして、相違点は 1) 韓国語を使って「働く理想自己」を持っているか否かで職場コミュニティへの参加態度に差がでること、 2) 働く L2 理想自己を実現できた場合でも、新たな働く L2 理想自己が見つからないと仕事への行き詰まり感が出る、3) 新たな働く L2 理想自己が見つかった場合、L2 に対する更なる学習動機づけは見られないものの、L3 への学習動機づけの高まりが見られたということでした。今回の分析結果をお聞きして感じたことは、「目標言語を使って何かができるようになりたいという L2 理想自己」と「働く L2 理想自己」は似て非なるものなのではないかということです。外国語教育に携わる教師の「働く理想自己」はいかなるものか、気になるところです。

（文責：戎 妙子）

・ 基調講演「言語教育におけるインクルージョンを考える」

山崎 直樹 先生（関西大学大学院外国語学部・外国語教育学研究科教授）

.....

今回のご講演では、本学会の会長である山崎先生がここ数年他大学の先生と共同で取り組んでいらっしゃる「言語教育におけるインクルージョンを実現する」という研究課題に関して実施されてこられた取り組みの成果を共有いただきました。インクルージョンという言葉も教育現場ではすっかり認識されるようになった感のある言葉ですが、辞書的な意味は「包摂」「何者をも排除しないこと」になり、それを逆の側面から見るとどのような人を排除しているかということになります。先生は、主にどのような側面で排除しているかという視点を、カセム他（2014）による6つの区分1) 感覚的排除 2) 知覚的排除 3) 身体的排除 4) デジタル化による排除、5) 感情的排除 6) 経済的排除、更に山崎先生独自の視点として 7) 言語的排除を例に説明くださいました。3) の身体的排除は目に見えることから意識しやすいですが、それ以外の項目はなかなか意識にのぼらないのではないのでしょうか。共同研究グループでは、発達障害、学習障害を持つ当事者を研究協力メンバーに迎え（インクルーシブなデザイン手法）、高校生から大学生くらいの学習者を対象とした教師向けの事例検討用の教材を作成し、ワークショップを開催されたとのことでした。「みんな同じスピードで文字が読めて書ける、みんなが人前で同じように音声を発することができる、みんなが90分、教室に座って学習に臨めるという前提はもはや成り立たない」という先生の言葉にハッとさせられました。近年、「配慮申請」をする学生が散見されるようになり、学校側から配慮をするよう求める連絡を受け取る回数が増えてきたように感じます。しかし、何をどのように配慮すればいいのか、その配慮は他の学生には不公平に映らないのか等、モヤモヤした気持ちを抱いている会員諸氏も多いのではないのでしょうか。ご講演のなかで当事者の困りごとのことばに続いて、その事例教材の一部として、関連する障害の説明を紹介くださいました。決めつけはいけませんが、特性を知っているといたないでは、教室内で実践できる教育的配慮も異なってくると感じました。今後は、教員として教えるスキルの向上は言わずもがなですが、それに加え、発達障害や学習障害に関する知識を増やしていく必要があると言えるかもしれません。今回は時間の関係など様々な要因があったからか、事例研究教材を紹介してくださるに留まりましたが、是非、山崎先生が共同研究グループで開発された事例研究教材を使って、本学会でもワークショップを開いていただきたいと思いました。

(文責：戎 妙子)

学会からのお知らせ

2024 年度の役員は以下の通りでした。

役職	役員
顧問 (学会)	今井 裕之 研究科長・学部長・教授
顧問 (総務委員会)	池田 真生子 研究科学務委員長・教授
顧問 (紀要委員会)	水本 篤 研究科教学主任・教授
名誉会長	吉田 信介 名誉教授
会長	山崎 直樹 教授
財務委員長	*名部井 敏代 教授
監査	守崎 誠一 教授
監査	高梨 信乃 教授
幹事長	山中 由香
総務委員会	*古屋 あい子 仲島 淳子 渡辺 怜
財務委員会	杜 瑞凌 藤澤 耀子
研究大会委員会	*上野 舞斗 竹田 里香 竹ノ内 朋子 浜谷 佐和子
広報通信委員会	*戎 妙子 岡上 路子 惟任 将彦 山本 祐太 (IT)
紀要委員会	*尹恵彦 田中 晶子

2025 年度の役員は以下の通りです。

役職	役員
顧問 (学会)	今井 裕之 研究科長・学部長・教授
顧問 (総務委員会)	水本 篤 研究科教学主任・教授
顧問 (紀要委員会)	大和 知史 研究科教学主任・教授
名誉会長	吉田 信介 名誉教授
会長	山崎 直樹 教授
財務委員長	*名部井 敏代 教授
監査	守崎 誠一 教授
監査	池田 真生子 教授
幹事長	山中 由香
総務委員会	*古屋 あい子 仲島 淳子 渡辺 怜
財務委員会	杜 瑞凌 藤澤 耀子 細川 真菜
研究大会委員会	*竹ノ内 朋子 竹田 里香 浜谷 佐和子 新原 由希恵
広報通信委員会	*惟任 将彦 戎 妙子 岡上 路子 山本 祐太 (IT)
紀要委員会	*尹恵彦 田中 晶子

(*委員長)

<編集後記> 2024 年度も本学会の多様性を具現化する素晴らしい研究会・研究大会が開催されました。研究大会委員会の皆様のご尽力に感謝いたします。 (文責：戎 妙子)